

## 令和6年度 第3回 静岡市多文化共生協議会

日 時 令和6年12月12日（木）

19:00～20:30

場 所 静岡市役所静岡庁舎新館3階

コミュニティ&ダイニングスペース「茶木魚」

### 次 第

#### 1 開 会

- 2 議 事 報告書の作成に向けた内容の整理
- ・「教育の機会や場づくりについて」
  - ・「留学生が住みやすいまちづくりについて」

#### 3 そ の 他

##### （1）第4回会議

ア 日時 令和7年2月6日（木）19:00～20:30

イ 場所 静岡市役所静岡庁舎新館3階  
コミュニティ&ダイニングスペース「茶木魚」

ウ 内容 報告書（案）の確認

##### （2）審議結果報告 令和7年3月予定

#### 4 閉 会

静岡市多文化共生協議会 第11期報告書の骨子について

## 1 報告書の構成（案）

- (1) 会長あいさつ
- (2) 目次
- (3) 委員名簿
- (4) 会議の報告
  - ア 会議開催概要
  - イ 会議で出された意見
- (5) 提言
- (6) 資料
  - ア 外国人住民人口統計
  - イ 会議録
  - ウ 静岡市多文化共生のまち推進条例

## 2 提言内容（案）

### 提言1：教育の機会や場づくりについて

- ・ 小中学校において多文化理解教育を受ける機会を拡充し、内容の充実を図る。
- ・ 外国にルーツを持つ子どもたちが、ことばの壁によって高校への進学をあきらめることがないよう、高校進学のための支援を充実させる。

#### 【具体的な取組】

- ・ 外国にルーツを持つ子どもたちのことばや文化など、多様な国や文化を多文化理解教育に取り入れる。
- ・ 日本語を母語としない子どもと保護者のための高校進学説明会の充実や、ハンドブックの作成など、高校進学に関する情報の周知に努める。
- ・ ことばの壁により学校の授業や高校入試への適応が難しい子どもや、日本で義務教育を修了していない外国籍の人などを対象にした夜間中学の設置に向けた研究を進める。
- ・

#### 【背景】

（会議で出された意見をもとに文章を作成）

### 提言2：留学生が住みやすいまちづくりについて

- ・ 日頃から日本や静岡の文化を学んだり地域の日本人と自然な形で交流できるよう、情報の提供方法について見直しを行う。
- ・ 市内の企業や事業所への就職を希望する留学生に対する支援を充実させる。

#### 【具体的な取組】

- ・ 生涯学習施設の活動内容や利用方法などについて、市内の大学等に直接周知を働き掛け、学生が立ち寄る場所へのチラシ掲示等により利用促進を図る。
- ・ 大学1、2年生のうちから企業との接点を増やしたり、市内企業に対して好事例の紹介をしたりして、企業の採用意欲を高める取組を進める。
- ・

#### 【背景】

（会議で出された意見をもとに文章を作成）

委員発言一覧  
(令和5年第1回から令和6年第2回まで)

1 教育の機会や場づくりについて

- ・予算や教員の数など制約が多いのはわかっていますが、足りないところを前提にして、こういうところの意見を追い風にして、ぜひ、どこにどういう資源を投入するかということを教育委員会にも考えてほしいと思います。(中島委員)
- ・おそらく人もお金も足りないですし、僕も外国ルーツの子どもの学習支援をしていますので現場の先生が週2回が1回になってしまったとか、週1回で何ができるのかという声が聞こえてくるのは、ずっと昔から変わらないんですね。人と金をどこへどう投入するかという問題になった時に、どこかへ入れるしかなく、このままお金がなくなっていく時に支援が続けられるかと言ったらそれは無理でして、そういう意味では外国ルーツの子の問題だけをピックアップするのが難しいとすれば、色々な形で色々な理由をつけて予算をつけてほしいと思います。(角替委員)
- ・なぜ日本語授業で身につけることが難しいのか、あるいはその前の中学の段階で日本語能力の習得に5年から10年かかるのか。子どもと若者のニーズについては日本語を学びたいという意欲のある若者とか、あるいは入試対策をしたいという前向きなニーズがあるにもかかわらず、やはりその習得に時間がかかるのは何か原因があると思うんですね。ですからその原因をしっかりと把握して、それに対してどう対応するかということを予算の中で、改善してほしいと思います。(松永委員)
- ・これから外国人がいっぱい来るんですね。それに関して行政とか先生たちとかが頑張っているけど、受け皿の学校で子どもたちが異文化について学んでいないと、多分難しいと思います。上のほうで頑張っていて外国人の子どもたちを受け入れようと思っても、毎日接触している子どもたちが、「何でお前こっちに来るんだ」とならないように、異文化についてもうちょっと学ぶ機会を増やしていただけたらいいなと思います。(エフィ委員)
- ・通訳とかをこれからもっともっと増やしていただけたらいいなと思っています。日本人だけが頑張るのではなくて、もうちょっと外国人を増やして、それは日本に住んでいる人とか、日本語ができる人とかに協力してくださいって一声かけていただければ、多分外国人はウェルカムになるんじゃないかなと思います。(エフィ委員)
- ・日本語を教えている先生たちは静岡市内の色々な所へ行っていると思いますが、やはり週1回か2回、1時間や2時間では足りないと思います。親は、家の中で母国語をなくしたくありません。なぜかと言うと、子どもたちは、中学になると日本語がうまくなります。ただ、親は下手なままで、親子のコミュニケーションはすごく難しくなっています。(照屋委員)
- ・先生たちが足りません。ボランティアももちろんありますが、大学生を活用できないでしょうか。(照屋委員)
- ・先生も子どもたちも頑張っていますが、一番頑張らないといけないのは親です。例えばペルーの場合は、小学校、中学校、高校は普通にそのまま上がれる教育になっています。ただ日本は違うので、中学校3年生の親からは、「高校はそのまま上がる

んでしょ。いや、試験があるって聞いていない」ということになります。今、学校を回っているのですが、小学校5年生の保護者の人たちに、こちらから、「中学校までは簡単に上がれるけど、高校からは試験に受からないと行けません」と言うと90%の保護者は知りませんでした。高校ガイダンスのときは、もう大体みんな中学校3年生です。それに8月で、あと半年で、今までの6年間やっていないことをするのは、無理だと思います。ですから、小学校1年生からとか、親の指導をしないといけないと思います。親に高校はこうなるよと指導しないと行けません。その壁は高さがありまして、子どもたちが一番可哀そうです。それは、学校が悪いとか、先生が悪いとか、子どもが悪いとかではなくて、まず当たり前のことを教えないといけないと思います。(照屋委員)

- ・自分は間違いなく日本の生活に慣れているわけです。皆様が1年で日本語の勉強をしようとしても、例えば私が他の国、インドネシアやフィリピンに行って、半年の間でどうにかしようとしても無理な話です。私が大事だと思うのは、やはり人と人との繋がりで。お母さんはお母さんなりに隣の人と仲良くしようとする意識を持つことが大事だと思います。(中村委員)
- ・学校での勉強と地域での生活は違うのではないかと思います。受験勉強をする子どもは、ある程度決められた範囲の中での勉強になります。しかしなかなか慣れないと思いますので、隣近所の人たちとの繋がりの中で話し合い、例えば同じくらいの学年の子がいれば教えてもらえると良いと思います。学校も私の住んでいる小学校の中に日本語教室があります。日本語を支援してもらえる教室です。放課後子ども教室もあります。校舎と接続した場所にあります。授業が終わってから、ボランティアの方が宿題の世話や話し相手になってくれます。現在は、日本人の両親とも働いている方が多く、家に帰っても留守のため5時まで面倒を見てくれるようです。また、7時まで見ることもできるよう。森っ子クラブもあります。地域の方のボランティア活動です。同じ年頃の子どもです。お話すれば色々なことをわかってくれる子どもは多いと思います。先生は忙しすぎます。そのためクラスにいる近所の子どもたちと行き来ができるような、お友達を作ると良いと思います。日本の子どもたちも色々な子と遊ぶことにより、遊んでいる子の外国の生活を教えてもらえるので良いことだと思います。(中村委員)
- ・地域としても、例えば野田先生の学校の留学生と地域の人たちとで交流をしていて、神輿をかついだり、運動会に参加したりしてもらっています。このような交流を通じて必ず助けてくれる人が出てくると思います。災害時を含めて、先生と共に地域の方で助けてくれる人がいると思います。誰もが皆、その地域に住んでいるとの存在感を出すことも大事だと思います。(中村委員)
- ・やはり週に1・2回というのはちょっと少ないな、できれば毎日というのがいいんだろうなと思います。受け入れ側として学校に外国ルーツの子どもたちが来てくれることは、大きな宝、それこそ多文化共生もそこで学べるチャンスだと思うんですね。そうしたら社会科の時間でも何でもいいんですけど、その子の国の言葉だとか、歴史文化などみんなで調べて発表したり、家の方にも来てもらって、ちょっと料理を紹介してもらったり、そうやって受け入れる側がみんな意識を持つとか。私はやさしい日本語の普及活動をやっているんですけども、先生方にもやさしい日本語でやってもらうといいと思います。学校にとっても外国ルーツの子どもがいるということは、大きな宝として捉えて、その子どもの文化とアイデンティティを大切に。その上で

の日本語というふうに考える必要があると思います。地域の方との連携というのもすごく大切だと思いました。(磐村委員)

- ・他の国の文化も別にその学校に外国人がいるからやらなくてはいけないとかではなく、外国人がいない学校でも、他の国の文化をどんどん紹介すれば、少しでも日本人の子どもにも大人にも勉強になると思います。保護者のサポートは必要ですね。まず日本語のサポートが必要だと思います。やはり親も何も日本語がわからないまま、子どもを育てるといのは結構大変だと思います。学校に子どもを連れて行って「よろしくお願いします」と言いますが、その後の壁は絶対あるんですよ。どうしても緊張はしてしまいます。日本人のほうから引っ張ってくれないと、そのコミュニティには簡単には入れないんですよ。自分は日本語をまあまあ話せるんですけども、それでも壁は大きいんです。こちらからだけではなくて、日本人からも来てくださいということが一番大きいと思いました。(花沢副会長)
- ・日本語を話せてもデスクワークとかをしたいと思ったら、やはり日本語がビジネスレベルでないとできないというのも結構ありまして、結局やってみたいと思っても、多分自信がなくて自分を止めるんですね。そういう日本語のビジネスレベルをどこで勉強すればいいとか、どこへ行けばいいとか、誰に聞けばいいとかわからないまま、結局仕事の分野が限られてしまうんですね。結局、もっと色々な出会いをしたい、もっと日本の文化を知りたいと思っても、壁はどうしてもあります。(花沢副会長)
- ・生活の質を上げていくための日本語教室とステップアップのための日本語教室とは別物であり、一つのところワンストップでは出来ないのではないのかと考えております。日本語教育の環境をトータルとしてどう作っていくか、多様なニーズに応える場を静岡市全体としてどう作っていくかが重要であると思っています。各々お金やスペースの問題などがあり、供給できるサービスの限界があるので、ターゲットを絞っていかなければ合理的ではないと思います。そうしますと、一つ一つの教室ではなくトータルとして、学校教育も含めてどういう環境を作っていくのかということが、多文化共生という大きな視点の中で日本語教育を考えているこの協議会の意義だと思っています。(中島委員)
- ・教室に来られない人たちのために、メタバース等を活用した場が作れないかとも感じました。(磐村委員)
- ・日本語をどこか外で使う機会というのは、外国語の習得にとっては非常に大切なことです。それがアルバイト先でも、どこでもいいと思います。私達は日本語学校をやっている側ですが、常に生徒が社会に出るための準備ですとか、もう実際に社会に片足突っ込んでいるようなことを意識した日本語の教育が必要なのではないのかと感じました。(野田会長)
- ・私が困ったことは、引っ越しの時の手続きが分からなかったことです。区役所に2週間以内に転入届を出すことを知らず、区役所へ聞きに行っても、あまり細かく教えてもらえず手続きに困りました。あとは、以前もお話した、子どもの保育園の探し方や申請の方法が分からず、保育園を探すにあたっては、文化の違い(ピアスの可否)により、入園が出来る保育園を見つけるのに苦労しました。(花沢副会長)
- ・私は現地の大学の日本語学科で4年間日本語を学びました。4年間勉強して文法は分かるようになったのですが、会話は先生との週に1回しかなくて、それも聞くだけで話す機会がありませんでした。そのため日本人と会っても日本語を話す自信がなくて



逃げていたのですが、それが悔しくて日本語が上手くなるためには日本に行くしかないと思って、一生懸命勉強して奨学金をもらって日本に来ました。そこから私が思ったことが、いくら勉強しても実際に使わないとあまり日本語を覚えないということです。これからも外国人が日本語を勉強するにあたり、先生や友達とかと日本語で会話することが大事だと感じています。(エフィ委員)

- ・インドネシア人で見ると、静岡県内では学生と技能実習生が多いです。学生としては、例えば入学の手続きとか小学校に入る子どもの手続きの文書がすべて漢字で大変とのことなので、文書を簡単にしたものがあるとよいと思います。あと、技能実習生からは年末調整についてよく聞かれます。(エフィ委員)
- ・外国に繋がる子ども向けのプレスクールには参加してみたいです。私は大学から日本に来たので、高校までの教育制度や学校制度について全然わからないため、将来結婚して子どもができれば、こうした支援が必要になるだろうと思いました。外国人にとって、日本の教育制度や学校制度は難しいので、その対応の一つとして留学生に日本の教育制度や学校制度を知ってもらうのもいいのではないかと思います。また、このプレスクールの運営にあたって県大や常葉大学の日本語ボランティアの話がありましたが、もし留学生のボランティアを募集していたら、私も参加してみたいですし、周りにも参加したいと思っている人もいるかもしれないと思いました。(金委員)
- ・市内の色々な所に教育の場、外国人の居場所があることが分かりました。外国人には色々なコミュニティが存在していますが、例えば親が外国人労働者で子どもが日本語支援が必要な場合に、どこに行けばいいのか分からない外国人もいます。そういう人やコミュニティに対しては、どうアプローチして、どういう日本語教育が有効になるのかなと思いました。私たち留学生に何ができるかと考えた時に、留学生もいきなり日本に来るなどの共通点があるので、身近なロールモデルとして子どもたちと対話ができたら、その子たちの役に立てるのではないのかと思いました。(金委員)
- ・生活者としての日本語はとても大切ですが、行政にはもう少し政策的に日本語教育を考えていただきたいと思います。例えば技能実習生が日本語ができないと相談に来たときどうすべきでしょうか。制度やキャパが決まっている中で、そこに行政がコストをかけてやるべきか意見がわかれると思います。(中島委員)
- ・中学から高校への進学はギャップがあり、そのまま高校に行けないというのはその通りで、こういう人達への対応がハイリスクアプローチになります。僕はここにはコストをかけるべきだと思っていて、彼らが高校に行き、その夢を実現するチャンスを得るために日本語を勉強する機会がしっかりと用意されるべきだと思っています。税金も時間も人も限られているなかで、しっかりマーケットを見極めて、どこに日本語教育の資源を投入するかを行政としてしっかり整理して政策としてやってほしいと思っています。(中島委員)
- ・私は公立の夜間中学校ができないかという話を教育委員会に行っています。文科省では都道府県や政令指定都市への設置を促進しており、今静岡県では磐田と三島がありますが、静岡市にはありません。周りに17歳で日本に来た日本語が全然わからない子がいたのですが、教育委員会に相談をしても、高校生の年齢だから試験を受けて入ってくださいという話になりますが、日本語が分からないので試験を受けるというレベルにはないんです。静岡県の公立の夜間中学の入学条件は、外国人の場合には、日本語能力に関係なく、とにかく勉強したい人であれば受け入れようという方向になってきています。そうした夜間中学校に入学して3年間で色々なことを学びながら、

日本語を勉強、実践すれば、その後高校に進学することにもつながっていくと思います。そのため公立の夜間教室・夜間中学が、どうしても必要になってくるというのが私の見解になります。(肥田委員)

- ・オンラインで3人のバングラデシュの方に日本語を教えています。妊娠や出産をしているため、それに関する行政の手続きとか何か困ったことがあれば言っておいてと言っているのですがあまり来ません。夫が日本語を話せるので何とかなっているのかもしれませんが。ただ、意外と必要な行政手続き自体を知らなくて、アプローチして来ていない可能性もありまして、そういう人がたくさんいないか心配しています。(肥田委員)
- ・生活者としての外国人に対する日本語教育ということですが、やはり成人の労働者と特にティーンエイジャーを含めた学齢期にある子どもたちの生活とは違うと思いますし、そこは厳格に分けて考える必要があると思います。(角替委員)
- ・中学生の学習支援で分数の計算を教えていた時に、分数の計算方法は分かるけれども、分子や分母という言葉が分からない子がいて、計算方法と同時にそういう言葉も教えてあげる必要があるということを思いました。あるいは高校受験のために、日米修好通商条約という条約の名前を覚えなさいといけなさいと言ったときに、なんでアメリカを「米」と書くのかという話になり、そうした言葉の意味も教えていかないと、高校受験に対応できないという現実もあると思います。そこは週何回かの日本語支援では限界がありますので、学校で対応できないかということは常々思っています。そういう意味では子供たちの進路形成とか、将来のアイデンティティ形成に言語がかかわってくるので、そうした部分に力を入れていただけるとありがたいです。(角替委員)
- ・色々な日本語教育の分野がありまして、留学・就労・生活、そして就学があります。つまり子どもから高校生ぐらいまでの年齢を対象とした日本語教育ということで就学の分野がありますが、これは政府の方でまだカリキュラムがまとまっていないような状況でして、それなりの問題の大きさや難しさを秘めているのではないかと思います。(野田会長)

## 2 留学生が住みやすいまちづくりについて

- ・有識者、関係者との聞き取り調査で就職活動期について非常に多いというのは、実は私も今日ここに来る前に持っていた感想そのものですが、日本語学校の留学生に、どうしてうちの日本語学校に来たんですかと尋ねると、静岡が好きで来ましたという人はいないです。静岡の情報が無いからです。たまたま紹介されて来たのが静岡だったとか、東京や大阪、大都市は避けたかったからという理由で静岡を選んだそうです。生活していくと、だんだん静岡は居心地がいい、ゆったりとして快適だなと、静岡の日本語学校、専門学校あるいは大学等に進んでいく。その後これが就職活動期になると、さあどうなるかという、文系の学生はおおむね希望どおりの進路を選択しているが、理系は卒業を機に県外に転出してしまふ。文系なら静岡でという人もいるかもしれませんが、私の知っている限りでは、結構静岡県外へ出ています。文系、理系を問わず。そういった実態があったりして、実は昨日、ちょうどフィリピンのうちの卒業生と話をしたのですが、3年ほど前に卒業した学生で、現在は愛媛県今治市に住んでいて、その学生は静岡でうちに来て勉強していて、一旦フィリピンに帰って、かなり日本語ができていた人なので、フィリピンで就職を見つけて日本にまた仕事に来て、たまたま縁があったのがフィリピン関係の仕事で、今治市に本社がある会社さん

だったものですから、今治の生活どうですかって聞いたら、「うん、焼津みたいですごく居心地がいいです」と言っていました。つまり、本当は静岡に行きたかった。東京とか大阪は避けたかった。静岡はすごく良いところだな、海があって、自分の住んでいた故郷にもなんか近くって、だけど静岡ではなく今治ですっていう実態があったりして、そういう学生は往々にして多いのかなと思いました。(野田会長)

- ・日本語ができる場合はまだいいのですが、理系の方々は英語とかで、日本語をまず使わないっていうこともあったりします。そうすると、理系の学生が就職した後のケアをどこまでできているのか。英語で採用された場合には、生活する上での言葉の支援が実際に行われているのかというところが少し気になる場所なんです。文系の場合は、おそらく日本語が中心になると思いますが、それにしても、就職した後のケア、支援というようなところはあるのでしょうか。大学側の私達は関わりようのない範囲です。就職先はどこそこという情報はわかりますが、どういう支援を受けながら仕事をされてるのかというのは情報がないので、その辺りがケアされているのか、住みやすい場所になっているのかを知りたいです。(ヤマモト委員)
- ・IT技術者の方々は割と日本語ができない状態で、インドなどの国々から直接日本に来て、ある程度片言の日本語を勉強してから来るケースが多いですが、生活に関してはまったく企業任せだと思います。(野田会長)
- ・私は、留学生のために定期的なモニタリングが必要だと思います。留学生の健康状態や学業の進捗状態も、常に確認をするべきだと思います。そして、留学生の日常生活に関するアドバイスとか、緊急のときにもアドバイスを提供する必要があると思いますので、可能であれば、学校あるいは市でも、定期的なモニタリング、例えばミーティングを開催したり、あるいは可能であれば家庭訪問をしたり、留学生のためのネットワーキングのイベントも開催してほしいと思います。(山下委員)
- ・商工会議所の会議の中で、最近静岡市に限りませんが、空き家が問題になっていて、その空き家をうまく活用して留学生の皆さんの住宅の支援ができないか、という話題が出たことがありました。全国的に見ると、他の自治体でも空き家をシェアハウスみたいな形で活用している事例もあるようですから、改めて静岡市と相談させていただきたいと思っています。(斉藤委員)
- ・就職活動期のところに、かなり多くのコメントが載っていて、例えば「1、2年のうちから企業との接点を増やしたり、市内企業に対して好事例の紹介をしたりして、企業の採用意欲を高めてほしい」とか、「学生のうちから経営者と留学生が直接交流する機会がほしい」というコメントがありますが、商工会議所の会員企業さんは中小企業の小規模事業者ですが、やはり今一番多く聞かれる経営課題は人手不足でして、採用意欲を持ってる企業さんは実は非常に多いので、それがうまくこういう形で書いていただいているとおおり、採用にうまく繋がられていないというのも実情だと思いますので、この辺をどうやって進めていくかという点を、会議所の活動の中で意識してやっていければと思っています。(斉藤委員)
- ・留学生の就職にはビザの問題がいつも付きまといます。特に文系の学生で、どういう仕事に就けるかといった場合、大学生の場合は割と自由に就職できるケースがありますが、例えば文系の大学を出て、料理人になリたくてもなれないです。あるいは、静岡県には美容専門学校がありますが、いくら美容師の勉強をしても、美容院に就職することはできません。そういった実態があります。ビザというハードルはなかなか大変で、その辺りは行政も絡んでくるのかなという気がします。(野田会長)



- ・日本人の大学生が東京へ行って戻って来ないのと、良く似ていると思いました。それから、海外の留学生が静岡に来て、静岡に対して好印象を持っているという、できれば住み続けたいというような気持ちを持っているというのは、非常にプラスだと思いました。ただやはりそれを逃していると言えるのではないかと思います。私の知り合いも留学生ではありませんが、ある職場にリクルートがあったときに連れて行きました。彼は私が判断するに、非常に好青年で、もう30歳を超えていますが日本語があまり上手ではないということで、社長さんも良い印象を受けたんですが、結局採用には至りませんでした。それはなぜかという、その上の会長さんが、「えー、外国人か。日本語喋れるの、どうやってコミュニケーション取るの」とおっしゃって、それで社内にそういう波風を立てたくないということで、その人は結局就職できませんでした。在留の外国人の方に聞きますと、「No Japanese, No Job」というのは一つの決まり文句になっているようで、やはり仕事ができる程度の日本語能力は要求されるのですが、ここをクリアするのは非常に難しいことです。その辺りが私個人で考えるならば、職場で育ててくださいと思いますが、入口のところでカットして日本語ができないから駄目というのではなくて、せっかくそれ以外のところで非常にいい素質を持っているにもかかわらず、そこに気付かないで育てられないという意識が、各企業にはあるのではないかと思います。やはり言葉の壁というのは非常に大きい。(肥田委員)
- ・外国人留学生というと、よくイベントをやるときに、留学生に来てもらいたいと言うと、「あー駄目、アルバイトでできない」というのが決まり文句になっています。母国から日本に来て、アルバイトをするのもいいですが、それがリクルートに結び付かないという、企業とのインターフェースが非常に悪いというところが問題ではないかと私自身も思います。ですから、留学生にとってみれば、一つは静岡のコミュニティに入ることですね。静岡はいいなと思っている学生さんが多いということで、そういう点ではうまく行っているのかも知れませんが、それプラス、企業とのインターフェースを学生の時期にアルバイトばかりしていなくて、その辺をうまく繋げるようなシステムがあれば良いのではないかと思います。せっかく静岡に住みたい、静岡で仕事をしたいという意欲はあっても、具体的にその壁が非常に高いというのが一つ、施策としてもう1本欲しいところです。(肥田委員)
- ・受け入れ側、日本人住民の意識啓発というのと大きく関わりがあるのではないかと思います。企業側も確かに日本語を媒介言語として仕事をするシチュエーションは確かに多いと思いますが、そればかりではないと思います。先ほどの日本語についても、職場で育てる意識であるとか、日本語はもちろんやり取りで重要な面がありますが、企業にとって一番必要なのは何かといえば、その仕事が達成できればいいのであって、その仕事を達成するための日本語はそんなに幅広くなくてもできる可能性があるのではないかという気がします。仕事にもよるとは思いますが。そういった意識が変わることというのは重要かもしれません。(野田会長)
- ・日本語教育をやっている立場から言いますと、今年の4月から、色々と日本語学校を取り巻く状況が変わりまして、「日本語教育の参照枠」という新しい枠組みができて、日本語教育というのは、日本語を教えるだけではなくて、留学生は社会的な存在である、社会の中で行為をするものであるという考えに基づいて言語教育をしましょうというものが始まっています。つまり、もう日本人であれ、外国人留学生であれ、同じ日本語を使う仲間だという考え方です。みんながみんな母語話者のような日本語を目指す必要はないということです。複言語者と言ったり複文化者と言ったりするものも絡んでいるのですが、そういった私達従来から住んでいる人の変容というも

のも必要だと思いました。やはり就職というのが一つの鍵になるのかなという気がしました。(野田会長)

- ・先日、静岡市国際交流課主催の関係団体の集まりがあったときに、会議が終わった後でハローワークの方にお話を伺ったんですが、今度新たに静岡へ移転してくる日本語学校の方から事前に相談を受けていて、静岡に来るに当たって、心配なのはまず住むところ、それから大勢の人を連れて来ることになるのでアルバイト先については非常に不安があるということでした。もう一つは、地域の人たちに受け入れてもらえるのか、今学校がある場所は静岡と比べると人口が少ない地域で、静岡は大都市だから外国人に対する抵抗感が少ないのではないかというお話をされていたのですが、その方は、地域の人たちと日本語学校の生徒さんが、一緒に住んでうまく生活できるのかどうかということを心配されていて、それは恐らく現在の場所でそうした問題があつての話ではないかと思います。留学生が住みやすいまちづくりというのは、やはり議事の一番最後にある、受け入れ側の日本人の意識啓発、まさに多文化共生の意識をお互いに持つことが大事だと思いますし、幅広に色々と考えていく必要があると感じています。(吉井委員)
- ・「多文化共生協議会」という名称のとおり、共生社会を考える上で留学生の住みやすさであるとか、日本語教育をどうするかというのは、非常に関連のある事柄だと思います。(野田会長)
- ・日本人は留学生と言うと全部一緒に見てしまいがちですが、日本語の習得レベルには様々なばらつきがあるように思います。そのような中で注意したいのは、留学生のみなさんがそれぞれの学校を卒業・修了してからどこへ行くのかということです。静岡の住みやすさと言ったときに、留学生の方々がどのように生活を立てていくのか、あるいは定住していくときに、どんな仕事にどんな形で就労するのかという点が気になります。結局それは、日本社会が留学生だった人たちを結果的に搾取している可能性はないのかということです。日本に留学して、何らかの学習をして、卒業して、母国ではない日本で正規で雇ってもらえた、安定した仕事を得られたということであれば、日本はいいところだよと言ってもらえると思いますが、いつまでたっても不安定な非正規雇用なのに、日本はいいと言ってもらえるのでしょうか。留学の段階だけではなく、就労の面からも考える必要があると思いました。(角替委員)
- ・専門学校の場合は、就職に直結するということがあって、就職先と専門学校が連携しているケースが多くて、就職できなければ専門学校も特に採る意味がない、採るだけ採って就職口がなかったら専門学校のイメージが落ちると思います。一方、大学というところは、就職のための大学も一部にはあるのかも知れませんが、それを前提としてやっているわけではなく、アカデミックなものを主にしてやるのではないかと思います。ただそうは言っても就職先がなければ大学のイメージも悪くなるので、推測ではありますが、就職口があると踏んで、学生を採っているのではないかと思います。他の大学に聞くと、就職は大学の就職課が一生懸命動いていて、セミナーに連れて行ったりしてなんとか収めることがあると聞いたことがあるので、行き先があると思いたい。ただモンゴル人については、私達の日本語学校には今1人もいませんので、恐らく他のエリアから来た学生ではないかと思います。大学から静岡に来るケースも結構あるので、そういう場合にどうしたらよいかという点については確かに課題だと思います。ちなみに、留学生の場合、学部で1年生から4年生、あるいは大学院に入るケースもあれば、静大とかは、夏休みだけ勉強するサマーコースで来る人たちも、広い意味では留学生になるのかも知れません。また、静大生に多いですが、1

年だけとか2年だけとか、そういう方もいらっしゃると思います。そういう場合は恐らく転入というか、一時的に単位交換制度みたいなケースもあると思います。色々な留学生がいるという点は、整理しておく必要があると思います。(野田会長)

- ・私も就活について沢山の思いがあります。私の視点では、逆に学生期と直結しているのではないかと考えています。学生期で学生生活を満喫しているという意見もありますが、それよりもっと前向きに目指すべきところは、留学生たちに早めに日本社会を知ってもらって、日本社会で活躍してもらいたいということです。企業経営者の意見にもありましたが、企業を見学してもらって、ここで就職できそう、活躍できそうというふうになれば、静岡の企業への就職につながるのではないのでしょうか。よくある事例で私も経験者ですが、仕事を1、2年で辞めてしまって他のところに行ってしまうとか、そういうのはミスマッチングだと思っていて、その解決方法の一つとして、せっかく静岡に来たのだから、静岡の企業を良く知ってから、東京で仕事があるか、静岡で自分に相応しい仕事があるかを判断して、最終的に静岡で就職してもらうのが一番良いと思っています。私も去年、新卒1年目で会社を辞めて今は大学院にいます。(金委員)
- ・学生期に行政ができることとしては、例えば通訳の仕事とか、翻訳の仕事を学生に依頼したり地域の公民館をもっと活用して語学講座を開いたりしてはどうでしょうか。私も焼津市内の公民館で中国語の講師をやらせてもらっていて、既に5年が経ちました。わざわざ静岡市内から焼津へ通っている生徒さんもいます。静岡市内では中国語の講座がなかなか見つからないので、わざわざ焼津市まで来ているそうです。それなら静岡市でやれば良いじゃないかと思います。中国文化に興味がある地域のひと、中国文化に詳しい留学生が公民館で一緒に活動できたらと思っています。留学生でも大学1年生や専門学校生が、色々な市や地域の団体から活躍の機会を提供していただければ、就活のときに私は学生時代に静岡でこんなことをやりましたというアピールにも使えると思います。東京などの大都市へ出て行ってしまっても、5年間、10年間仕事してから第2のふるさとのような思いで静岡へ戻って、静岡で何かやろうという人も出てくるのではないかと考えています。留学生の視野を広げて、留学生たちのポテンシャルに目を向けて、通訳や翻訳などの色々な機会を提供していただいて、留学生たちが自ら力を付けて最終的に静岡で活躍できるようになって欲しいと思います。(金委員)
- ・先ほど肥田委員から留学生はアルバイトばかりするのではなく、もっと社会に溶け込めという意見がありましたが、確かに留学生でも特に日本語学校生の場合は、どうしてもコンビニやファストフード、日本語を全く使わない食品工場とか、そういうところでアルバイトをしていて、それがそのまま、専門学校生や大学生になっても同じような生活をしていたら、留学生のポテンシャルは活かされないことになってしまいますね。その辺りについては、留学生がそこから抜け出す力が欲しいし、企業側でも「よし、ちょっと日本語が未熟だけど雇ってみようか」という会社が増えると、本当に金さんがおっしゃったことを実現できるかもしれないと思いました。(野田会長)
- ・留学生が住みやすいまちづくりということで、自分がここに来るまでに考えたことは、安心や安全がキーワードではないかということです。違う国に行って自分が何かをつかみたいとか、アイデンティティを確立したいと思うような人というのは、健常時は色々なことができるのではないかと考えています。例えば調子が悪くなったときに病院に行くにはどうしたらいいとか、そんなところがわかりやすくなっている

と、留学して来た人たちが安心するのではないかということをごに来る前は考えていました。(赤田委員)

- ・企業の入口のところでカットされてしまうのは自分もちょっと悲しいと思いますし、やはり受け入れ側の意識だろうと思います。異なる考え方や文化があるということが素敵なことだということが、日本にいる私達には少し欠けているのではないかと思います。言葉の問題なんて、今は翻訳アプリでも何でもありますので、そういうところが大事なのではなくて、もちろん日本語の壁というのは重々わかっているつもりではありますが、私が今接している子どもたちには多様な人と接することは尊いことだということ、10年後、20年後に大人になる今の子どもたちと一緒に、そんな雰囲気を醸成していきたいなということをごまず一つ思いました。また、外国にルーツがある方だけの問題ではなく、友人というか、あらゆる人にとって便利というのが、住みよいまちにつながって行くのではないかと思います。(赤田委員)
- ・私は、周リから預かっている意見が多いです。まず、静大にはチューターや先輩といったシステムがあります。大学、市役所、銀行口座作りなどを全て留学生会館で案内してくれたので困ることはありませんでした。でもそういったシステムがない大学だと、1人で行くしかなくて、それで困っているという意見がありました。全く日本語を学んでいないので、フェイスブックで静岡インドネシア人留学生会などのコミュニティを調べて、そこで例えば3か月後に静岡へ行きますので色々教えてくださいというパターンが多いです。(エフィ委員)
- ・インドネシア人の場合は、コミュニティが支援するケースが沢山あります。でも、この間困ったのが、短期で来た留学生がいて、住むところを探したのですが、どこにも断られてしまいました。1か月や最大でも3か月間の留学許可が大学から下りたのですが、住むところは自分で探してくださいと言われました。それで困って、モスクに住みますかと提案されましたが、その人は女性だったので、ちょっと無理でしょうということになって、結局その人は辞退しました。こちらの方でも色々調べましたが、1か月、3か月の短い期間だと保証人が見つからないことが多いです。大変費用が掛かるという理由で辞退したとのこと。本当に残念ですけれども、短期で来る留学生にどう対応するか、行政とか、あるいは大学も含めて考えていただけたら嬉しいです。(エフィ委員)
- ・健康保険とか年金についてですが、つい昨日、ある留学生のところに年金関係の通知が送られてきて、エフィさんこれ何ですか、私が払わなければいけないですかと聞かれました。写真を送ってもらって見たら、これはただのお知らせですよ。年金などの制度を知らないまま静岡、あるいは日本に滞在して、わからないまま帰国してしまう人が多いです。(エフィ委員)
- ・休日の過ごし方がわからない学生が多いという意見がありましたが、私の知人にはお祈りをする場所がないので、なかなか出掛ける気にならないという人が多いです。本当は静岡市内の色々な場所を散歩したいのですが、お祈りする時間になると外出先でお祈り場所がなく、帰らなければならないので、面倒だし忙しいので結局出掛けないそうです。(エフィ委員)
- ・就職活動で、言葉が原因で不採用になった話は私の周りでも聞いたことがあります。この間、9月にある会社ができるということで、後輩達が何人かで採用面接に行ったのですが、言葉が理由で全て断られてしまいました。日本語があまりできないから、申し訳ありませんと言われました。その人たちは大学院生です。でも、理系なので英



語が中心で、教授が日本語は必要ありませんと言うそうです。ですが、私が思うに日常生活では大変困っています。病院や買い物は全て先輩や友達に頼っています。肥田委員の、会社など受け入れ側が日本語を教えるという意見はとても良いアイデアだと思いますし、大学でも日本語クラスの受講を義務化してもらいたいです。あとは、やはり言葉がわからないままだと不安だと思います。せっかく日本にいるのに、本当はみんな帰りたくないと思っています。日本で就職したいと言っています。ただ、日本語ができないから申し訳ありませんというのは、人材として本当にもったいないと思います。(エフィ委員)

- ・留学生といっても、短期の交換留学だったり学位を取って進学や就職まで考えていたり色々だと思いますが、気になっていることが2つあります。留学生の地域参画が促されているかどうか、そういうシステムをつくる地域になっているかどうか、受け入れ側の意識醸成・体制整備は検討すべきことだと思っています。就職に関してこれだけ意見が上がってきていますが、こういうことは静岡だけではなくてほかの地域でもあると思いました。大学にはキャリアセンターという部署があって、どうやって就職活動をしていくのか、キャリア形成をどのようにしていくのかということを支援しています。それを留学生にどれだけやれているか、それができるようなスタッフがいるのかという点ですが、行政や商工会などが横のつながりで、外国人人材のキャリア支援、キャリアカウンセリングできる人材を置くだけでも、日本語力がないから採用しないなどの事例は減るのではないかと思います。すり合わせができるはずです。まずキャリアカウンセラーを置いて個々のキャリアを大切にしていけば、自然と良い人材とまちづくりにつながっていくと思います。もう一つ気になっているのが、今、メンタル不調を起こしている学生が目立つことです。授業以前に体調確認とメンタル不調にどう向き合うかということが一つの課題になっていて、そういうことが起きていないようであれば、ここは良い都市だろうと思います。相談体制という点でも、手厚く対応して欲しいと思っています。(磐村委員)
- ・文部科学省に招聘された留学生は確かバイトは駄目ですよね。大学では日本語を勉強していましたが、少しでもバイトをやった方が日本の生活に慣れるのではないかと個人的には思います。そのまま日本で働くことになっても、母国に帰っても、日本語を勉強すれば役に立つと思います。(花沢副会長)
- ・就職活動については、企業から断られるケースが多いという話は私も聞いています。私も以前ハローワークへ行ったときに、日本語ができないと紹介できませんということ言われて、個人的にやりたい仕事なかったこともあります。今はインターネットの求人サイトの方がバラエティーの幅が広いです。日本語をどれぐらい話せるとか、働きたい時間とかを自分で選ぶのですが、そういうアプリとかで、「外国人」と入力すると、「外国人OK」と自動的に出てくるので、調べていくと、ほとんどが飲食店で、工場はまだ少ないです。もし工場とかで働くことになったら、工場の方が英語でも何でも、簡単な職場で使える言葉を覚えれば、外国人の方も日本語が頭に入るので、外国人と日本人が互いに歩み寄ればいいのではないかと思います。(花沢副会長)
- ・人が足りないという話もありました。日本人があまりやりたくない仕事を仕方ないから外国人がやるという人もいれば、日本人が嫌だったらやっぱり私も嫌だと言う人もいます。それは分野によるかもしれないし、面接のときにどんな対応をされたのかに依るのかもしれないし、本当に難しいところです。私も最近始めたバイトがあって、今日初めて仕事で電話を受けました。電話に出たら19時に2名の予約をしたいと



いうことでした。大丈夫ですよと返事をして、その後聞いたことのない日本語を言われて、「申し訳ありません。私は初めて電話に出たのですが、それはどういう意味ですか。」と聞いたら、その方が怒ってしまい、とりあえず19時で大丈夫ですかって言われて。なぜ怒られなければならないのかと思い、聞き間違いがあったのではないかなと思って、それだけでもう電話には出たくないと思って、難しいですね。本当に少しでも自信があるかないかが大きいのかも知れないですね。とりあえずこれぐらい日本語で仕事ができる、でも入ってみたらやっぱり難しい。日本だし、日本語も話せるし、話さないと仕事ができないから、結構プレッシャーをかけられる職場が多いと思います。職場の雰囲気だけではないと思いますが、一緒に働く人がお互い様の精神で、一緒に楽しく仕事できれば、そこをフォローできれば良いのではないかと思います。(花沢副会長)

- ・留学生に限りませんが、日本語でずっと勉強して、バイトもして、結構疲れると思いますので、外国人同士の交流も必要だと感じました。静岡県内で働いている外国人のフェイスブックのページがあって、ほとんどが英語の講師向けですが、誰でも入れるので、イベントに参加していくと英語や他の言葉に興味がある日本人の方も結構いて、面白いイベントも開催しているので、私も何回か行って結構楽しかったです。ストレスを発散できるし、意見交換も日本人とも他の外国人とも何が大変なのかとか、結構面白いと思います。皆さんもそういう所へ行行って、いろいろ他の外国人の意見とかを聞いても良いのではないかと思います。(花沢副会長)
- ・私は夫が静岡の人ですが、仕事を探すと、通訳や翻訳はモロッコでやっていて大変だったので、それはやりたくないから、テレビの関係もやっていたので、テレビの関係をやりたいのですが、静岡だとあんまり求人が出ていないので、もう調べるのをやめて東京へ行こうかなと思いました。子育て中で娘を連れて行こうと思いましたが、静岡は住み易いですよね。東京より人が少ない。結構大きい街ですが人は少ないですね。あと静岡の人は優しいです。差別があまりないんです。外国人だからというのがそんなにないですね。東京へ行くと電車から降りるだけでも結構ひどいですよ。だから東京に行くだけで疲れるので、それだったら静岡が大好きだし、静岡で本当に色々できたらいいなと思って、今も静岡に居ますし、これからも静岡に居たいです。(花沢副会長)
- ・留学生に限らず、外国人全般の問題ですが、日本で働くに当たり、細かい日本語の言い回しが障壁になってます。外国人を受け入れる日本人側の問題として捉え直さないと、いつまでたっても変わらないのではないのでしょうか。日本語を学ぶ環境がなくて、学校では年齢が違っただけで受け入れてくれないし、日本語学校へ行こうとすれば結構な費用が掛かって、仕事をしながらではとても無理だし、どこで勉強するかといったら、テキストを買って家でやればという感じになるので、何か冷たいなと感じます。そういうところをNPOや支援団体だけではなくて、社会全体としてやっていけないかと感じています。(角替委員)
- ・今、スタートアップがキーワードになっていて、県内にそういう企業とか、チャレンジできる場所が増えていけば、県外で就職するしかなかった学生も県内で挑戦できる、そして好きな静岡に定住できるのではないかと思います。以前、県内の会社で働いていたときに、周りに現地採用のインドネシア人のエンジニアがいて、社内に礼拝室がなくてトイレの清掃用具が入っている小さな部屋で、順番待ちで礼拝していて、何か解決方法はないのかと考えさせられたことがありました。また、企業に限ら

ず、いろいろな場所で早い時期からインターンシップに参加できる機会が増えれば、静岡での就職につながるのではないかと思います。(金委員)

- ・講義の中で、例えば離職が多いという話が出てきましたが、留学生に限らず、孤独というのが一つの要因になっているのではないかと思います。東京に行っても、また静岡に戻って来るといのは、やはり土地勘なり、そこにつながりがあるということではないかと思います。行政としてどうやって孤独という問題に向き合って行けるのかというのが一つの鍵になって来るのではないかと思います。今まで情報提供というところ、例えば相談窓口だとか、そういうのは確かにあるんですけども、そういうところに行って、情報を得てきて、その後は自分でやりなさいよということですね。そこに行くのも知らなかったりだとか、行っても結局何にもならなかったということもあるわけですが、講義の中で出てきた伴走型の支援というのが望まれると思います。市民参加型の伴走型のサポートシステムというのが、相談窓口ではなくて、そういう形でのシステムを作ることが大事ではないかと思います。私達が開いている自主夜間教室もそのサポート型の一つの形ではないかと思います。先日、会社を退職したばかりの参加者から、退職金の申請書類の書き方について相談を受けました。その方にしてみれば、私達の教室に来ているのでサポートすることができる。そういったずっと付いて回るようなサポートシステムというのが、どうしても必要になってくるんじゃないか、そうでないと孤独はやっぱり解消できないのではないかと思います。(肥田委員)
- ・情報提供をするときに、多言語対応ができてるのか、それに対する実績や評価がわかるようにしておくことが重要だと思います。情報提供だけであとはご自由にどうぞというのでは、伴走にはならないと思います。(角替委員)
- ・いろいろな情報が留学生のためにありますが、それが役に立つことがありますか。外国人住民に情報が届いていますか。留学生だけではなく、外国人住民全体に必要だと思いますので、どういう形で届いているのかと思いました。(山下委員)
- ・留学生への情報提供と、それ以外の住民の方への情報提供は同じことなのではないかということでしょうか。先ほど角替委員も発言されていましたが、パンフレットや掲示を作りましただけで情報提供したということにはならないということでしょうか。実際に私の学校でも、こういうイベントがありますよという掲示をただけでは留学生は誰も参加しますとは言わず、クラスの中で担任の先生が「こういうイベントあるけど参加する？」と聞くと、「はい、行きます」とみんなで手を挙げるということによくあります。(野田会長)
- ・留学生について、静岡市は定住率を問題にしていますが、全国的に政令市などと比較して、静岡市がそれだけ定着しないというか、留学生が静岡に住まないという問題が果たしてあるのかどうか、確認がまだ取れていないので、それが政令市の中ではまずまずなので、もっとこれを伸ばしましょうというのか、同じような政令市の中ではかなり低くて、全然伸びがないというのか、どんどん外へ出てしまい困った問題ですという前提で話が進んでいますが、本当にそうなのかというのがわからないと、この議論が本当にすべき議論なのか、もっと伸ばすべき議論をすればいいのか、遅れている部分をキャッチアップするような議論がいいのかということがわからないというのが1点です。それを前提として、いただいた質問については、一つは講座がどうでしょうかという話ですが、講座に限らず、今日の聞取りの内容には外国人の留学生がああして欲しい、こうして欲しいといろいろな希望が出てきてるんですが、なぜそれを希

望しているのか、それをするによって自分たちがどうなるのかっていうのがわからないと、単なる希望に聞こえてしまうので、講座をしてどうなるのかがわからないと、この人たちの希望を聞いてあげれば、打算的ですけど、定住とか定着するようなものにつながるのかがわからないので、ただここに出してきた希望を、じゃこういう形で考えましょう、こういう希望が出てきたんだったらこういうふうに応えましょうというのは、果たしてそれがいいことなのかどうか。その人たちの希望がかなうという部分ではいいのかもしれないですが、今日この会議で話し合っている内容の目的として、講座情報をきちんと伝えれば、就職するんですかとか、定着するんですかということとは少しずれると思うので、私は希望を聞けばいいということではないような気がします。(吉井委員)

- ・企業との話については、些細なことかもしれないですが、お祈りする部屋を用意するとか、建物に配慮するとかいろいろなことを気にするよりも、日本人を採用した方が費用も掛からないし、楽でいいという考えがあるとすると、そこに企業側のモチベーションが上がるような何かがないと、なかなかマッチングが難しいのではないかと思います。(吉井委員)
- ・平成26年度に市役所の中でプロジェクトチームを作って、今日と同じようなテーマで、市役所の中のプロジェクトチームで話し合いがされた経緯があるようです。その中では最終的に結論は出ませんでした。静岡市内にある大学と地元の企業などがマッチングしていない。文科系の学生が多い中で、文科系の人たちが就職できるような就職口が市内にたくさんあるのかということではないので、やむを得ず外に出てくという傾向があるのではないかと思います。そのプロジェクトチームの途中までの結論としてあったようなので、その問題がいまだに続いていると思いました。いくら静岡市が好きで住民にいろいろ知り合いが増えて友達ができて、やむを得ずここには就職口がないので出ていきますってことになると、前回話し合った内容をもう少し解決できるかどうかかわからないです。そこを何とかしないと、相変わらずそこは問題として残ったままになるのではないかと思います。(吉井委員)
- ・先日大雨が降ったときに災害多言語支援センターで、逃げてくださいという情報を多言語の機械翻訳で出しましたが、とても出しきれない。あれだけ次から次へと、大雨の情報や電車が止まりますという情報が次から次に出ると、4、5人で手分けしてやりましたが、一つの情報を直すだけでも10分位掛かるので、あれだけ次から次へと出てくると、直しきれない。いろいろな方から様々な言い方で日本語習得の話が出てくるので、多言語も大事ですが、やはり日本語を覚えてもらうところがないと、最後は行き詰まるのではないかと思います。日本語教育が就職先を増やすというよりも、遠回りかもしれませんが、日本語教育にどう力を入れていくかというのが、学校、民間のボランティアの人たちも含めて、いろいろな問題の鍵になるのではないかと思います。(吉井委員)
- ・留学生の力を借りながら生涯学習センターや生涯学習交流館で行う外国語講座ややさしい日本語講座を増やしてはどうでしょうか。現在、日本には多言語による教育の機会がほとんどないので、地域でやるしかないと思います。また、就職支援については、キャリアコンサルタントなど人を置いて、それぞれの環境に働き掛け、かつ留学生一人一人のキャリアをサポートしていけば、かなり解決できるのではないかと思います。(磐村委員)

- ・情報発信については、市内の大学や短大、日本語学校が発信力を持っているので、そこを介するようにすれば、それほど難しい問題ではないと思います。それともう一つは、少しでも日本語を話せないと、これはどうしようもないところもあるのではないかと思います。日本語の難しさは、ニュアンスの違いでとても解釈が違ってくるところにあるので、今は世界的に英語が主流になっていることも考えて、日本語と英語ぐらいいは通訳できる体制が整っていればよいと思います。(中村委員)
- ・私が会長をしている学区の小学校には外国人の子どもが10人ほど通っています。また、クラブハウスで週2回、日本語指導をしていますので、こういうところと交流してはどうでしょうか。地域では、住民同士のつながりではないけど、顔を見たら話し掛けるしかないんですよ、嫌な人とは絶対に話しませんから。そこのところをいかにして中に入れるような方法を地域としては作るしかないと思います。そこを外れて嫌だ嫌だとなると地域が困ってしまいます。地域の日本語学校にもできるだけ地域の行事に参加してもらっています。みこしを担いでもらったり、運動会に出てもらうようにしています。今日、市長と話した際に、市長から人口が減っているので留学生も大事にしてほしいと言われました。これからは、静岡に定住するということに力を入れていくと思います。相談の窓口については、静岡市国際交流協会や国際交流課を中心に対応していけばよいのではないかと思います。(中村委員)
- ・就職の前であるとか、転職のときであるとか、いろいろ切迫した状況になったときに、先ほど肥田委員もおっしゃったように、窓口はもちろんありますが、その窓口につながるまで大きなハードルがあるのではないかと思います。私も伴走型というのはとても大事だと思っています。先ほど企業の方の理解が必要というお話もあって、礼拝をトイレのところでなんて、もう聞いていて切ないなあというふうに思いましたが、やはり私達日本人の考え方、多様な文化に触れるとか多様な言語に触れるとか、多様な人材と関わることの素晴らしさ、アイデアが豊富になるとか、豊かになるということを土台として、風土として持っていないと、企業でもそうはなっていないだろうと思いますし、そうすると私が今勤めているところでは、どういうことができるかということにつながっていくのですが、やはりその切迫した問題のところのサポートと、それからもっと前からとか、もっと地道な人としての考え方という部分と、二つあるのではないかと思いますと感じました。そして、その切迫した問題に伴走するためには、大変多くの人の数がいる。行政だけでは難しいと思ったときに、これは言語が違うとか、文化が違う人だけではないのですが、共生という意識、隣近所付き合いとかつながりがある、「困ってるの？じゃあ一緒に役所へ行ってみようか」とか、何かそういうところ、折角の静岡の温かさが広がっていくとよいのではないかと思います。(赤田委員)
- ・日本商工会議所が今年の7月に行った調査で、「人手不足の状況及び多様な人材の活躍等に関する調査」が発表されましたので、そのデータを少し紹介します。人手不足の中で、シニア人材や女性の活躍等と同じく、外国人材という部分で尋ねた部分がありまして、こちらの調査は全国の中小企業2,392社に対して行われたものです。外国人材の受入ニーズというところで、外国人材を既に受け入れている企業は24.6%ということで2割超、それから今後受け入れる予定というところが4.5%、検討中が22.5%、これらを合わせると51.6%ということで、企業の半数以上が外国人材の受入れに前向きな意向を示しているということでした。規模別に見ると、20人以下の企業では既に受け入れているのが13.3%にとどまっていますが、今後受け入れる予定が3.6%、検討中が22.6%ということで、規模の小さい企業にも一定の受入れが見られるという結果が出ています。業種別に見ると、外国人材を既に受け入れている企業の



割合は、最も高いのが宿泊飲食業44.5%。それから製造業の36.7%ということで、4割前後で高いということです。それに今後受け入れる予定、検討中を合わせますと、人手不足が深刻な運輸業が48.2%、介護看護業が38.9%で、およそ4割から5割近くに達しています。もう1点聞いているのが、企業が政府や自治体などの公的機関に求めることで、外国人材の受入れに当たり最も多いのが、受入制度に係る書類の簡素化・迅速化、これが49.4%、受入れに係るコスト負担の軽減が49.6%となっています。続いて、技能実習制度の見直しに伴う転籍制限の緩和が決定していることもあり、安易な転籍の防止34.4%、自治体等による日本語教育の拡充33.9%、受入体制整備への資金面での支援32.2%、という結果が出ています。それから今日の資料にもあるとおり、就職支援のところで受入側の意識啓発のための取組であるとか、地域における啓発の取組というところでは、現場のニーズが高まっており、その中でも業種別で特に高い業種があるので、こうした企業側の意識啓発とか文化作りを考えるに当たって、率の高い業種というのを少し念頭において施策を進めていただきたいと感じました。(斉藤委員)

- ・受入れに対して前向きな企業が多いということでしょうか。そうした前向きな企業と就職したいという留学生との間に、どういった作用があればいいのか、また講座を開いている地域の方が留学生にぜひ参加してもらいたいと思っている地域があり、またそこに参加したいと思っている留学生がいる。その間に入る、いわば仲介と言いましょうか、そういった役割が今後重要になってくるのではないかと思います。それからやはり日本語が、その仲介の役割を果たす大きなポイントになるのではないかと思います。(野田会長)